

その少女が目を覚ましてまず思ったのは、「寒い」ということだった。ここがどこで、自分が誰なのかを自問自答する前に、寒くてたまらなかつた。

上半身を起こして、思わず身を抱いた。

その身に纏っているのは、申し訳程度の薄い布一枚。靴すら履いていない。

どこかに光源があるのか、自分を包んでいるのは完全な暗闇ではない。夜明け前のようなおぼろげな明度がある。

目が慣れて、次第にあたりの様子が窺えるようになってきた。

全景ははっきりしないが、少女は広い空間にいた。「くしゅん」と漏らしたくしゃみが反響したので、どうやら建物の中のようなようである。ムツと潮の匂いが充満していて、よく聞けば、かすかに水の流れる音がする。

目覚めたその時、己が得体の知れない場所にいる。

しかし、少女は不思議と恐ろしさを感じていない。

それどころか、ここに「いる」というだけで、奇妙な安心感を覚えている。何故かはわからない。

ただ、このおぼろげな暗闇にあって、何かに守られているような安心感。

その理由を考える少女だったが、巡らせる思考は再び出たくしゃみによって霧散した。

いけない。ここにいたら凍えてしまう。

考えるのは、後。

せめてここより温かいところへ、明るいところへ行かなくては。

少女は立ち上がり、一步を踏み出した。

硬い地面は石造りであろうか。少女は小さな歩幅で少しずつ、光を感じる方向へ、慎重に歩いて行く。足裏から冷たさが染み込んで、頭が起きていく。そしてそのひたひたという一歩ごとに、パズルにピースがはまっていくように、少女の記憶は明確になっていく。

——そうだ。

私は——。

遠く向こうに、ついにははっきりとした光が差し込んでいるのが見えた。天井から差し込む光が、スポットライトのように一か所に落ちていた。

駆け出すこともなく、少女は静かにその陽だまりを目指した。静謐な光が及び、肩にかかる自分の髪が薄い桃色をしていると認識する。

周囲を見回して、とうとう少女は思い出した。

流れ込んでいる水。ひっそりと自生する植物。ところどころひび割れた石畳。倒れた燭台。左肩と右腕の欠けた女神像……。

前方……大きく開かれた扉の先の、石畳の小広間。

ここが、どういう場所なのか。

やはり、少女は知っている——。「見つけた」

——その時、少女の前方から声がした。

少女は目を凝らす。

薄い暗闇に、二人の人間が立っていた。真っ黒のフードとマントをつけており、闇も相まって顔は見えない。重たい空気を引き連れて、亡霊のように佇んでいた。「母様の言っていた通りだ」

二人のうちのひとりが、少女に近づきながら言った。あとけなさの残る、澄んだ声だった。

少女は身構え、黒ずくめをキッと睨みつけた。

黒ずくめはひるまず、少女へと歩いて行く。

やがてぴたりと止まったそこが黒ずくめの「射程」であると気づくのが、少女はあまりに遅かった。

黒ずくめは少女へと、マントの中から伸ばした右手のひらを向けた。

何かしらの言葉を黒ずくめが呟いた。「じゃあね」とも「ごめんね」とも聞こえる、不思議な耳触りの言葉だった——。